

モーツァルト室内管弦楽団 第171回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester/ 171.Regulärkonzert

〈ベートーヴェン・シリーズ〉その6

2016年7月30日(土)午後2時■いずみホール

Samstag, 30. Juli, 2016 14Uhr Izumi Hall Osaka

■主催:モーツァルト室内管弦楽団 <http://moz-kam.org>

■協賛:いずみホール〔一般財団法人 住友生命福祉文化財団〕

■マネジメント:大阪アーティスト協会 TEL06-6135-0503/FAX06-6135-0504



モーツァルト室内管弦楽団 第171回定期演奏会

Mozart-Kammerorchester / 171.Regulärkonzert

2016年7月30日(土)午後2時●いずみホール

Samstag, 30. Juli, 2016 14Uhr Izumi Hall Osaka

〈ベートーヴェン・シリーズ〉その6

ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)

交響曲 第2番 作品36

Sinfonie Nr.2 D-dur op.36

I. Adagio — Allegro con brio

II. Larghetto

III. Scherzo: Allegro

IV. Allegro molto

ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58*

Konzert Nr.4 G-dur für Klavier und Orchester op.58*

I. Allegro moderato

II. Andante con moto

III. Rondo: Vivace

* * *

交響曲 第8番 ヘ長調 作品93

Sinfonie Nr.8 F-dur op.93

I. Allegro vivace e con brio

II. Allegretto scherzando

III. Tempo di Menuetto

IV. Allegro vivace

ピアノ：池田 洋子* / Klavier: Yoko Ikeda*

コンサートマスター：釋 伸司 / Konzertmeister: Shinji Shaku

指揮：門 良一 / Dirigent: Ryoichi Kado

Profile



池田洋子●ピアノ Yoko Ikeda, Klavier

第7回日本学生音楽コンクール高校の部全国第1位文部大臣賞受賞。東くめ・照子・貞一、井口愛子の各氏に師事。東京芸術大学在学中に渡仏。パリ・エコール・ノルマル音楽院最高クラスに転入学。ジュル・ジャンティ及びアルフレッド・コルトー氏に師事。日本人として最初のリサンス・ド・コンセール(演奏家資格)を得て卒業。マリア・カナルス国際コンクール第2位(1位なし)、ヴィオッティ国際コンクール金賞などに入賞。パリをはじめ、国内外でのリサイタルは勿論、大阪フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団の定期演奏会をはじめ、東京交響楽団、日本フィル、関西フィル、モーツァルト室内管弦楽団など日本の主要オーケストラと数多く共演の他、室内楽活動も目覚ましい。1990年ザ・シンフォニーホールにて演奏歴30周年記念リサイタルを開催して以来、5年毎に記念リサイタルを開き、2015年川西市みつなかホールにて演奏歴55周年記念リサイタルを開催し、いずれも好評を博す。

一方1996年以来、ニューヨークで開催されるサミット・ミュージック・フェスティバルや、パリ近郊のムーラン・ダンデで開催されるマスタークラスに招かれ、演奏と指導を行なっている。また、ポルト国際コンクールをはじめ、国内外のコンクールの審査員も務めている。川西市民文化賞、兵庫県生活振興功労賞、兵庫県文化賞、瑞宝中綬章など受賞。神戸女学院大学音楽学部名誉教授。現在、大阪音楽大学客員教授。日本ショパン協会関西支部長。川西市民合唱団団長、川西音楽家協会会長。

ベートーヴェンの偶奇性

ベートーヴェンが残した9つの交響曲は「不滅の9曲」と呼ばれ、ベートーヴェン以前はもちろんのこと、ベートーヴェン以後においてもこれらを越える交響曲はないと言われており、聴衆にとって、また演奏者にとっても交響曲の古典であり続けている。さてその9曲であるが、奇数番目の交響曲と偶数番目の交響曲とでは曲の性格が違う、ということがよく言われるようだ。第1番は初期の作品であるから除外するとして、第3、5、7、9番と、第2、4、6、8番とでは、前者が大型で男性的、後者が小ぶりな女性的とされる。一方で、ベートーヴェンはピアノ協奏曲も5曲書いている(ヴァイオリン協奏曲のピアノ用編曲も加えれば6曲となる)。モーツァルトの20数曲には及ばないとしても、ベートーヴェン以後には有名作曲家ではこんなに多くピアノ協奏曲を作曲した人は見当たらない。ベートーヴェンのピアノ協奏曲においても交響曲と同様のことが言えそうである。奇数番目の第1、3、5番は男性的で偶数番目の第2、4番は女性的? 第5番は《皇帝》と呼ばれ、調性も交響曲第3番《英雄》と同じ変ホ長調であるから問題なく男性的と言えよう。第3番は調性がハ短調、あの交響曲第5番《運命》と同じである。ハ短調は他にもピアノ・ソナタ《悲愴》、コリオラン序曲などがあり、まさにベートーヴェンの調と言ってよく、男性的な悲壮感に溢れている。それらに比べて本日演奏する第4番はいろいろな点で女性的と言ってよさそうである。第1番、第2番は交響曲第1番と同様初期の作品なので外すべきかもしれないが、それぞれが奇数番目、偶数番目の特徴を備えているように見える。

本日のプログラムは、交響曲第2番と第8番、ピアノ協奏曲第4番、といずれも偶数番目の作品が並んでいるので、この点について論じてみたい。交響曲第2番は、調性も明るいニ長調で、全曲を通じて明快な曲想を持ち、両端の楽章は跳躍感に富んでおり、極めて男性的な交響曲と言えそうだが、いかんせん第3番《英雄》の前という立ち位置が災いしている。「ベートーヴェンの交響曲においては第2番と第3番の間に巨大な飛躍がある」と言われて、第3番《英雄》がいかにかすごいかという議論において比較の対象にされてしまっている。この第2交響曲はベートーヴェンの生涯で最悪の時期に作られた作品であるが、この時期に書かれた有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」は、耳の病気に苦しみ自殺まで考えた彼の遺書と考えるべきではなく、そのような不幸を克服して再出発しようという、過去の自分への訣別の書なのである。そのような背景のもとに作られたこの交響曲が男性的でないはずがない。第2番は上記の偶数番目の系列には属さないとすべきであろう。ただ、第3番に比べると、その後で作られた第4番とも共通しているが、形式が古典的でハイドン、モーツァルトに近く、小ぶりな印象を与えるのは致し方ないところである。

交響曲第6番《田園》はどうであろうか。この交響曲は第5番《運命》と並行して作られており、初演も同じ演奏会で行われた。二つの同じジャンルの作品を同時に作ろうとする場合、お互いにできるだけ違った性格を持たせようとするの

は自然であろう。ベートーヴェンの天才はこの2曲において、可能な限りお互いが異なっており、《運命》と《田園》と呼ばれる通りまるで正反対の性格を持たせることを可能にしたのである。《田園》が女性的と言えるかは議論のあるところであろうが、《運命》とくらべれば上記偶数系列の作品となるのであろう。

これと同様な議論が第7番と第8番においてもできるかもしれない。この2曲も並行して作られているからである。だがこの2つの交響曲は第5番と第6番ほどには違っておらず、互いの共通点も多い。その共通点とは各楽章のリズムの特異性である。このことは第7番でよく言われることなのだが、第8番においても特徴的である。第8番の第2楽章は第7番のそれと同じく、緩徐楽章であるべきところが速めのテンポのアレグレットとなっているのだが、非常にユーモラスであり、また曲の長さが大変短い。また第3楽章は、ベートーヴェンの交響曲中唯一のメヌエットである(第1番の第3楽章はメヌエットと記されているが、実体はスケルツォである)。これら2点が第8番を第7番と比較した場合、小ぶりな交響曲と思わせる原因であろう。だが両端の楽章はすばらしくダイナミックで男性的そのものである。第8番を偶数系列の女性的な交響曲と位置づけることには抵抗を感じる。いずれにせよ、第2番と第8番の本日の演奏によって聴衆の皆さんが判断されればよいと思う次第である。

ピアノ協奏曲第4番について話を進めよう。この曲はベートーヴェン以前のピアノ協奏曲とも、ベートーヴェンの他のピアノ協奏曲とも非常に違っている。第1楽章冒頭がピアノ独奏ではじまり、オーケストラが休んでいること、第2楽章がオーケストラとピアノの対話の形になっていること、が主要な相違点である。この曲の性格が女性的であることは前後の2曲、第3番ハ短調、第5番《皇帝》と比べなくともよく理解できる。中でも非常に面白いのは第2楽章で、オーケストラが居丈高に大声で話しかけるのに対して、ピアノはやさしくそれを受け流す、という男女の対決にも似た構図が面白い。何度かの対決の後「男性」はなだめられるようにだんだん大人しくなっていく、終わり近くで「女性」は突然能弁になり、「男性」にとどめを刺すかのように見える。この曲ばかりはベートーヴェンが女性の視点で書いた作品のように思えるので、上記の偶数系列に入れるのは大賛成である。

■交響曲 第2番 ニ長調 作品36

1802年、ベートーヴェン32歳の作品。第1楽章に付けられた序奏はかなり長くて、第1楽章の主部との共通要素はほとんどなく独自の世界を展開している。これは同じニ長調のモーツァルトの交響曲第38番《プラハ》の影響を受けてのものであろう(《プラハ》の序奏は36小節、ベートーヴェンの第2番の序奏は33小節ある。因みに、ベートーヴェンの他の序奏のある交響曲では、第1番が12小節、第4番が38小節、第7番が62小節である)。第1楽章の主部では、第1主題がチェロとコントラバスによって奏される。第1主題がこのように低弦楽器によって奏されるのは他には第3番《英雄》だけである。この点は第2番が《英雄》の先駆であるとみなされよう。第2楽

Program Notes

章は大変優雅で軽やかなアンダンテ、第3楽章は明快なスケルツォ。第4楽章は面白いリズムを持った跳躍的な第1主題ではじまる非常にダイナミックな音楽である。前述の「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いて人生の再出発を誓ったベートーヴェンの底知れぬエネルギーが沸き上がってくるのを感じる名曲である。

■ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58

1806年、ベートーヴェン36歳の作品。同じ頃に交響曲第4番、3曲の弦楽四重奏曲《ラズモフスキー》などが作曲されている。前述のように非常にユニークな作品で、冒頭から独奏ピアノが登場するのは第5番《皇帝》も同じなのだが、第4番はオーケストラが全く休んでピアノ独奏だけなので、ベートーヴェンの獨創性が際立っている。主題はいずれも穏やかで柔軟性に富み、曲の構成も随所にベートーヴェンらしい力強さはあるながらもなめらかに進行していく。前述のように大変ユニークな第2楽章の後に、ほとんど間を置かず快速の第3楽章が続く。ベートーヴェンらしさは十分に感じさせながら、第3番や第5番と比べると全体にしっかりとした女性らしさに溢れたすばらしい協奏曲である。

■交響曲 第8番 ヘ長調 作品93

1812年、42歳の作品。前述のように交響曲第7番と並行して作られたが、初演は別々の演奏会で行われた。第1楽章は4分の3拍子で、3拍子で始まる交響曲は他に第3番《英雄》があるのみである。pppやfffといった当時にはまれな極端な強弱記号が使われており、強弱の対比が際立った躍動感に満ちた楽章である。第2楽章は短くてユーモラスなアレグレットで、主題は「メルツェルさん」という歌カノンから取られている。メルツェルとはメトロノームの発明者の名前前で、ベートーヴェンはその発明以後、旧作の交響曲をも含めて自作品にメトロノーム速度を書き込んでいる。第3楽章は他のすべての交響曲ではスケルツォになっているのに対して、この交響曲では古い形式のメヌエットが採用されている。これはベートーヴェンの懐古趣味であろうか。中間部のトリオではハイドンにならって管楽器のソロ（ホルンとクラリネット）が活躍している。フィナーレは特徴的な6連音符を駆使したリズム感に満ちたやや長めの楽章で、特に後半部での息も継がせぬ展開はすばらしい。だが、第7番のフィナーレ後半のようにあまりのエネルギー感の高揚に息苦しくなるほどではなく、力強いがすっきりとまとまっていて聴きやすいと言える。本日の演奏でこの第8番の大交響曲ぶりに注目していただければ幸いである。

モーツァルト室内管弦楽団 第170回定期演奏会

2016年6月18日(土)いずみホール

北川 順一(音楽ライター)

恒例の「モーツァルトとハイドン」シリーズもすでに10回目。当楽団は非常に響きのバランスのよいオーケストラで、たとえばトランペットも、決して突出も委縮もせず、全体の響きに金色の柔らかな輝きをもたらしており、はっと打ちこまれるティンパニもあいまって、その調和のとれたサウンドははとてみ快い。

『パリ』には、現行の緩徐楽章の他に全く別の初稿が残されており、当夜はその稿も合わせて演奏された。洗練という点では現行版に一步譲るものの、動的な旋律線が印象的である。もともと、それゆえパリでは差し替えを求められたのかもかもしれないと感じる。

モーツァルトの第22番の協奏曲を独奏する内田玲子氏。なんという美しい音色だろうか。いささかの狂いもない完璧なタッチと、内面から自然に発露するリズム感で、細かい連符から朗々たるカンタービレに至るまで、自由自在に生き生きと弾き分けていく。とりわけ潑刺とした終楽章では、まるで作曲者とともに愉悅の境地に戯れているかのようだ。そして表情豊かな管楽器群が、歌心豊かなピアノ・ソロに和声の厚みと柔らかな光輝を添える。

『ロンドン』も、非常に明快かつ重厚な演奏である。とりわけきびきびとした弦楽器群の確信に満ちた動きが、ハイドン最後の交響曲にふさわしい快活さと威厳を演出する。

名があるほどには比較的実演に接する機会の少ない三作であるが、またあらためてじっくりと聴いてみたくなるような、とても印象に残る素敵な演奏会であった。

次回《ベートーヴェン・シリーズ》その7(最終回)予告

《第179回定期演奏会》

2017年12月予定 午後2時 いずみホール

交響曲 第9番 二短調 作品125《合唱付き》ほか

独唱:未定

合唱:モーツァルト記念合唱団(合唱指揮:益子 務)

指揮:門 良一

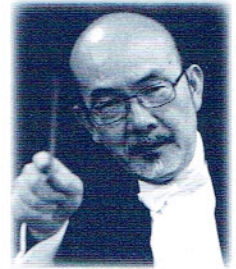
★パーティやイベントを音楽の生演奏で★

モーツァルト室内管弦楽団があなたのお手伝いを致します。パーティやイベントを音楽で盛り上げましょう。小は二重奏から大は40人のオーケストラまで、ご予算に応じた編成をご提案します。曲目等のリクエストにも応じます。お問い合わせはお気軽に下記までどうぞ。

モーツァルト室内管弦楽団事務局:090-9286-9290

門 良一 ●指揮 Ryoichi Kado, Dirigent

1939年大阪生まれ。1962年京都大学理学部物理学科卒業、67年同大学院終了。京都大学オーケストラには学部、大学院を通じて10年間在籍し、フルート奏者、指揮者を務め、同オーケストラの発展に多大な貢献をする。また、客演指揮者の故近衛秀麿、故朝比奈隆、故岩城宏之、故若杉 弘、故奥田道昭、秋山和慶各氏等のもとで副指揮者を務め、薫陶を受ける。70年モーツァルト室内管弦楽団を創立、常任指揮者となり、同楽団を日本有数のプロ室内オーケストラに育て上げた。モーツァルト、ハイドン等の古典派の作品を35人の室内オーケストラで優雅に繊細に演奏する独自のスタイルを確立している。企画力にも優れ、モーツァルトの「予約演奏会の再現」やオペラ《イドメネオ》の世界初ノーカット上演などの大きな企画を成功させている。また、世界的名手との協演も多く、ピアノのマリア=ジョアオ・ピリス、シブリアン・カツリス、ヴァイオリンのライナー・キュッヒル、ホルンのペーター・ダム等との協演においてはソリストの絶大な信頼を得て大成功を収めている。近年は古典派だけでなく前期ロマン派やフランス音楽においても、企画、演奏両面で注目すべき成果を上げている。アマチュアの指導にも熱意を持ち、京都産業大学神山交響楽団の音楽監督・常任指揮者を創立時より務めている。モーツァルト研究者として知られ、1982～2011年NHK大阪文化センター、1992～2011年同神戸文化センターにおいて「モーツァルトを聴く」の講師を務める。京都産業大学名誉教授。



モーツァルト室内管弦楽団 Mozart-Kammerorchester Japan

1970年に指揮者 門 良一によって設立され、45年間一貫して30数名のメンバー構成を維持するわが国では数少ない本格的プロ室内オーケストラである。レパートリーはモーツァルト、ハイドンを中心とした古典派からバロック、前期ロマン派に及び、最近ではフランス近代の作品にも手を伸ばしている。モーツァルトに関しては交響曲と協奏曲の全曲を演奏した日本唯一のオーケストラであり、創立当初から新モーツァルト全集に準拠した楽譜を使用していることは注目に値する。91年のモーツァルト没後200年に際しては2年にわたり記念シリーズを催し、なかでもモーツァルトの予約演奏会プログラムを完全に再現した日本初の企画は大いに話題を呼んだ。演奏スタイルは中規模編成の特色をフルに生かしたもので、的確なテンポ、明快なリズム、清澄なサウンドは定評のあるところである。関西一円で演奏活動を展開するなかで、90年からは大阪いずみホールを本拠として年6回の定期演奏会を開催。また隔年毎に東京定期演奏会を行い既に17回を数えている。海外では88年にはドイツ民主共和国文化省の招聘による旧東独国内への演奏旅行を成功させている。内外の著名アーティストと数多く協演しており、なかでもマリア・ジョアオ・ピリス(85、87年)、シブリアン・カツリス(93、94年)、ペーター・ダム(83、86、88、98、00年)、ウィーンフィル木管アンサンブル(86年)、ライナー・キュッヒル(90年)らとの名協演はいまも語り草となっている。91年に姉妹団体、モーツァルト記念合唱団を誕生させ宗教曲等で活発に協演する他、93年には堺シテリオペラの協力による〈モーツァルト・オペラシリーズ〉を開始し、いずれも好評をもって迎えられている。06年1月にはモーツァルト生誕250年記念特別企画としてオペラ《イドメネオ》の世界初オリジナル・ノーカット版演奏会形式上演を挙行し絶賛を浴びた。「素晴らしい成果」(毎日新聞)、「この楽団は注目」(朝日新聞)。07～09年全10回にわたる〈没後200年記念ハイドン・シリーズ〉を、09～11年全18回にわたる〈創立40周年シリーズ〉を、また10年からは〈ベートーヴェン・シリーズ〉を開催している。

●メンバー コンサートマスター 釋 伸司

第1 ヴァイオリン	釋 伸司、本多 智子、稲庭 真理子、北村 奈美、松本 紗希、森住 憲一
	大西 秀朋、中野 瑞己
第2 ヴァイオリン	中川 敦史、都筑紗智子、田原口安代、徳田 雅子、幣 晴代、清水めぐみ
ヴィオラ	道幸 明美、白木原有子、三上 哲、灘儀 育子
チェロ	山岸 孝教、南口 真耶、大西 泰徳、石塚 俊
コントラバス	土屋 綾子、松本 友樹、北田 由美
フルート	大江 浩志、本庄 ちひろ
オーボエ	藤原 博司、須貝 絵里
クラリネット	高橋 博、門 小夜子
ファゴット	佐伯 利之、倉永 晴美
ホルン	佐藤 明美、岡田喜美子、垣本奈緒子、大宮 徳子
トランペット	大西 由起、滝村 洋子
ティンパニ	泉 純太郎

インスペクター:中川 敦史 ライブラリアン:本多 智子

